

岩倉使節団とバーリンゲーム使節団に関する 先行研究についての考察

黄 逸

A Review of the Secondary Literature on the Iwakura Mission and the Burlingame Mission

HUANG Yi

Abstract

Japanese research on the Iwakura Mission can be divided into two stages, namely that of pre and post Second World War. The work of the pre-war period focused on the two fields of diplomatic and economic history. The post-war period has shown much more diversification and internationalization, especially in the field of comparative history of thought and cultures.

Research into the Burlingame Mission to the late Qing China began in the United States, and also included the results of Japanese scholars. Research into the history of China-US relations undertaken in the People's Republic of China have also born fruit. Chinese scholars have made achievements building upon the work of their American counterparts. Recently a new "shared history" approach, aimed at reinterpreting the history of China-US relations has attempted to provide a completely new and transnational historical approach to the study of the Burlingame Mission.

This paper will investigate the various secondary literature on both the Iwakura and Burlingame Missions in order to understand the historical development of research in this area.

Keywords : 岩倉使節団、バーリンゲーム使節団、先行研究

はじめに

明治4（1871）年12月から明治6（1873）年9月にかけて、岩倉具視（1825-1883）を特命全権大使として明治新政府の高官や留学生で構成された使節団は、各国元首に国書の捧呈、幕末期に諸外国と結ばれた「不平等条約」の改正のための予備交渉、そして近代的西洋文明の調査などを目的として公式的にアメリカをはじめとする欧米諸国を視察した。岩倉使節団の欧米視察に関する記録は、使節団における公私報告書や日記のみならず、とりわけ当時の使節団随員である久米邦武（1839-1931）氏によって整理されて上梓された5冊組で全100巻の『米欧回覧実記』（博聞社、1878年）¹⁾は使節団行程に関わる詳細なドキュメンタリー集である。『米欧回覧実記』の出版をきっかけとして、岩倉使節団を中心とする様々な学術研究がはじまった。一方、岩倉使節団が出航した三年前に、清国史上初めての公式的使節団が欧米諸国へ旅に出た。しかしながら、この使節団を率いた正使は清国役人である志剛（1818-?）と孫家穀（1823-1888）であるが、実際に使節団の実権を握ったのは退任した北京駐在の初代米国公使であるアンソン・バーリングゲーム（Anson Burlingame、中国名：蒲安臣、1820-1870）である。この使節団は「不平等条約」改正の交渉を進めつつ、近代的西洋文明を体験したが、実際の正使のバーリングゲームをロシアのサンクトペテルブルク（Saint Petersburg）で失ったものの、条約改正交渉において欧米諸国より一定の承諾を得たといえる。帰国後、正使の志剛や随員の張德彝（1847-1918）がそれぞれの視察経歴と感想を報告書や旅行記として出版した。これらはこれまでのバーリングゲーム使節団研究にとって貴重な原史料となった。

これまでの岩倉使節団に関する研究は、第二次世界大戦を分水嶺にして戦前の研究と戦後の研究に分かれている。戦前の研究においては、条約改正の研究課題を巡る外交史研究の視点から始まり、一部の研究は維新経済史上の意義、及び日本の近代的陪審制度に至るまでの成果を収めた²⁾。そのほか、『実記』を史料として使節団の外交・外遊活動を全般的に描いた概観的研究成果もある³⁾。戦後の研究においては、まず条約改正問題に伴う外交史的研究の延長線上で専門的研究が進んでいる一方、家永三郎『外来文化撰取論』の公刊をきっかけに岩倉使節団研究における思想的かつ比較文化的研究が登場した。1976年以降、岩倉使節団を巡る研究において、これまでの外交史的研究や思想史、比較文化史的研究はさらに進んだが、『実記』に基づいて本格的な歴史的研究が急速に幅広く展開していたことが大きな特徴としてあげられる。そのほか、

1) 第二次世界大戦後、復刻版名は『特命全権大使米欧回覧実記』、全5巻、宗高書房、1975年。本稿では、以下『実記』として示す。

2) 土屋喬雄「岩倉大使一行欧米巡回の維新経済史上の意義」、『政経論叢』9巻4号、1934年、のち『明治前期経済史研究』一卷、（日本評論社、1944年）、所収。尾佐竹猛「陪審の視察」、『明治文化史としての日本陪審史』、（邦光堂、1926年）、第二章所収。

3) 森谷秀亮「岩倉全権大使の米欧回覧」、史学会編『東西交渉史論』下巻、（富山房、1939年）所収。

岩倉使節団に関する個別研究の論文が次第に発表され、戦前における外交史上及び経済史上の意義の分析のみならず、使節団の組織や歴訪各国別の検討も開始された。思想史的かつ政治史的研究はいうまでもなく、宗教や音楽、科学等々、これまで全く対象とされていなかった分野までにも分析のメスが入れられ、研究は多面化すると同時に一層精緻かつ個別化している。そして、岩倉使節団ないし『実記』の研究は、一行歴訪の現地史料、とりわけ当時の新聞史料の発掘と分析により新たな分析がなされ始めた。近十数年以来、とりわけ欧米の視線から岩倉使節団一行の歴史的意義について再考した研究成果⁴⁾が現れている。

近代中国外交史研究では、日本の坂野正高『近代中国政治外交史』⁵⁾と中国の丁名楠による『帝国主義侵華史』⁶⁾などがあるが、バーリンゲーム使節団については断片的にしか言及されていない。これまでのバーリンゲーム使節団研究は、アメリカの Frederick Wells Williams (1857-1928) による『Anson Burlingame and the First Chinese Mission to Foreign Powers』⁷⁾の著書があるが、ドイツ人の Johannes von Gumpach (1814-1875) による『Burlingame Mission: A Political Disclosure by Official documents Mostly Unpublished』⁸⁾は米清関係を中心とするのみならず、清末における対外政策の変容まで概観的研究成果として後進の研究者に大いに役立つ。そして、近年阪本英樹『月を曳く船方—清末中国人の米欧回覧』⁹⁾は近代的東西文化交渉の背景にバーリンゲーム使節団の欧米視察について考察したものである。また手代木有見『清末中国の西洋体験と文明観』¹⁰⁾は、清末渡欧した中国知識人・外交官の西洋体験を考察対象として中国知識人の西洋価値観への認識について検討したものである。

日本岩倉使節団と清国バーリンゲーム使節団との比較的研究に関して、巖鉉鈺「岩倉使節団與蒲安臣使節団出使欧米之比較」¹¹⁾は中国において代表する論文であり、これはプロレタリア文化大革命以降の日中外交史における初めての対比研究成果として注目されている。日本学界における両使節団の対比的な研究は、学際的研究論文である武田雅哉「大英博物館を見たふたつの東洋—『米欧回覧実記』と『環游地球新録』—」¹²⁾である。

-
- 4) イアン・ニッシュ編・麻田貞雄（ほか）訳『欧米から見た岩倉使節団』、ミネルヴァ書房、2002年。
 - 5) 坂野正高『近代中国政治外交史』、東京大学出版会、1973年。
 - 6) 丁名楠『帝国主義侵華史』、中国科学出版社、1958年。
 - 7) WILLIAMS, F. W.: Anson Burlingame and the First Chinese Mission to Foreign Powers, Charles Scribner's Sons, New York, 1912
 - 8) GUMPACH, J. Von: Burlingame Mission: A Political Disclosure by Official documents Mostly Unpublished, Shanghai, London, and New York, 1872
 - 9) 阪本英樹『月を曳く船方—清末中国人の米欧回覧』、成文堂、2003年。
 - 10) 手代木有見『清末中国の西洋体験と文明観』、汲古書院、2013年。
 - 11) 巖鉉鈺「岩倉使節団與蒲安臣使節団出使欧米之比較」、(『広西大学学报哲学社会科学版』、1994年、第6期) 所収、88-92頁。
 - 12) 田中彰・高田誠二編『『米欧回覧実記』の学際的研究』、(北海道大学図書刊行会、1993年) 所収、97-111頁。

本稿は、便宜上、上記の関連する先行研究を、(1) 岩倉使節団に関する研究、(2) パーリーゲーム使節団に関する研究、という二種類に分けて詳細に検討する。それを通じて、学術史における両使節団の先行研究を考察する。

一、岩倉使節団に関する研究

1. 日本における戦前研究成果の概観

岩倉使節団及び『実記』に関する研究は、戦前の研究と戦後の研究に分れている。下記の表1は戦前における岩倉使節団関係の研究成果として、歴史学者の大久保利謙氏によってまとめられたものである。

表1 戦前の岩倉使節団関係研究成果¹³⁾

番号	著者	題名	掲載誌・所収書	発行年
1	尾崎 三良	明治四年岩倉全権大使欧米巡遊に就て	講演速記録 (維新史料編纂会) 十一輯	大正5年
2	信夫 淳平	明治初年岩倉大使遣外始末 (一)	国際法外交雑誌 二五巻七号	大正15年
3	信夫 淳平	明治初年岩倉大使遣外始末 (二)	国際法外交雑誌 二五巻八号	大正15年
4	吉野 作造	明治外交史の一節 — 岩倉大使日米条約改正談判始末	『社会経済体系』第二十巻 (日本評論社刊)	昭和3年
5	吉野 作造	岩倉大使日米条約談判の始末	明治文化研究 五巻四号	昭和4年
6	熊原 政男	岩倉使節一行の欧米図書館見学	図書館雑誌 二五年二号	昭和6年
7	藤井 甚太郎	明治四年岩倉大使一行の米英産業調査	開国 二巻三号	昭和8年
8	藤井 甚太郎	明治四年岩倉大使一行の米英産業調査 (続)	開国 二巻四号	昭和8年
9	土屋 喬雄	岩倉大使一行欧米巡回の維新経済史上の意義	政経論叢 九巻四号	昭和9年
10	三宅 雪嶺	岩倉大使一行 (上)	婦人之友 三二巻三号	昭和13年
11	三宅 雪嶺	岩倉大使一行 (下)	婦人之友 三二巻四号	昭和13年
12	森谷 秀亮	岩倉全権大使の米欧回覧	『東西交渉史論』 (史学会編・富山房刊)	昭和14年
13	尾佐竹 猛	擬新定条約草本	明治文化 十二巻一号	昭和14年
14	菊田 貞雄	条約改正と岩倉大使外遊の意義	明治学院高商論叢 十一号	昭和15年
15	佐波 亘	切支丹制禁の高札撤去と 岩倉特命全権大使一行の米欧回覧	『植村正久と其の時代』 (補遺・索引) (教文館刊)	昭和16年
16	土屋 喬雄	岩倉大使一行欧米巡回の維新経済史上の意義 (*9の再録)	『明治前期経済史研究第一巻』 (土屋喬雄著・日本評論社刊)	昭和19年

13) 大久保利謙編『岩倉使節の研究』、宗高書房、1976年、366頁。

戦前の岩倉使節団を巡る研究成果について本格的かつ概観的にまとめたのは歴史学者である故北海道大学名誉教授田中彰氏といえる。田中氏は科学史学者の高田誠二氏と共に編著した『『米欧回覧実記』の学際的研究』において、戦前・戦後における岩倉使節団と『実記』に関する研究史概観を執筆した。とりわけ戦前の研究成果について、二つの研究の特徴を挙げている。第1の特徴としては、岩倉使節団における戦前・戦後研究を貫いているのは、岩倉使節団を外交史的視点からとらえているということである。第2の特徴は、この使節団の維新経済史上の意義がいち早く昭和初年に問われているということである。その二つの特徴を詳細に検討するために、田中氏は主として土屋氏の論文「岩倉大使一行欧米巡回の維新経済史上の意義」、森谷氏の論文「岩倉全権大使の米欧回覧」を例として評論した。土屋論文における維新経済史上の意義を明らかにしたことに対して、当該論文の第2章「『米欧回覧実記』に現れた感想」において、鉄や石炭の産業上の重要性、機械産業や農業技術の移植などの分析を検討し、特に東西の発想の違いや学問の相違、ないし宗教と政治における東西の「性情」に言及したことを比較文化的視点から賞賛した。他方、森谷論文に対しては、岩倉使節団のアウトラインを歴史的に描いた概観的のものであると指摘したが、とりわけ岩倉使節団の目的について、近代先進諸国の制度、文物の見聞・調査を、条約改正予備交渉よりも優先していたことを留意したことについて積極的に評価した¹⁴⁾。

総合的にいえば、戦前における岩倉使節団の研究は、もっぱら外交史的研究に重点がおかれたのであるが、その研究成果が戦後の中学校歴史教科書に反映されているのである。一方、岩倉使節団を概括的に言及した研究成果は、先述の森谷氏の論文のようにすでに戦前にもあったのである。それにもかかわらず、『実記』ないし岩倉使節団を巡る包括的かつ本格的な歴史的研究は戦後からはじまったのである。

2. 日本における戦後の研究と成果

戦後、岩倉使節団と『実記』を巡る研究史のアウトラインを詳細に描いたのは、歴史学者である田中彰氏である。田中氏は自著『岩倉使節団の歴史的研究』（岩波書店、2002年）において岩倉使節団および『実記』の研究史について四つの研究時期¹⁵⁾を規定している。本稿は、田中

14) 前掲注12、3-5頁。

15) 田中氏は、1993年上梓された編著『『米欧回覧実記』の学際的研究』の中で、岩倉使節団および『実記』における戦後の研究史について三つの研究時期を規定しているが、2002年公刊された自著『岩倉使節団の歴史的研究』の中で、戦後の研究史について四つの時期に分けて規定している。両著では、第一期（1945年-1960年）と第二期（1961年-1975年）の区切りは間違いなく一致しているが、第三期に関して、1993年の編著において「1976年-現在」と表示しているが、2002年の自著において「1976年-1990年」と明白に示している。1993年の編著では第四期が現れていなかったが、2002年の自著では「第四期1991年-現在」と示している。第四期の時期区分の現れは、田中氏本人の学術的認識の発展として考えられるよりも、むしろ岩倉使節団ないし『実記』の研究にともなう比較文化的かつ思想史的研究成果が途切れなくわいていくためであるといってもよい。（前掲注12、3頁。田中彰『岩倉使節団の歴史的研究』、岩波書店、2002年、

氏の研究時期規定を踏まえて各期の研究の特色や成果などについて検討する。

第一期（1945年－1960年）の特徴は、戦前に始まった条約改正問題を中心とする外交史的研究の延長線上で専門的研究が進んだことである。その中で、下村富士男氏の研究は第二期に早々に著した『明治初年条約改正史の研究』¹⁶⁾にまとめられたと田中氏は指摘した。また、この時期に『実記』の史料を使った『外来文化摂取史論』¹⁷⁾の上梓をきっかけとして、岩倉使節団ないし『実記』をめぐる思想史的研究が芽生えた¹⁸⁾。

第二期（1961年－1975年）でも、前期には外交史的研究が継続される。その中で、上記のように下村氏の著作が代表とされるが、さらに稲生典太郎氏と石井孝氏の研究¹⁹⁾が加わり、外交史研究にも幅が出ている。一方、この時期に思想史ないし比較文化史的研究が登場したのである。これが第二期の特徴であると田中氏は強調している。それを代表する論文はともに1961年に公刊された。それらは加藤周一氏「日本人の世界像」（『近代日本思想史講座』八、筑摩書房、1961年、のち『雑種文化』、講談社文庫、1974年、『加藤周一著作集』七、〈近代日本の文明史的位置〉、平凡社、1979年、所収）、芳賀徹氏「明治初期一知識人の西洋体験」（島田謹二教授還暦記念論文集『比較文学比較文化』、弘文堂、1961年、所収）である²⁰⁾。

加藤論文は、明治維新から第二次世界大戦にかけての幅広い国際関係史を背景に、日本の世界像の変遷、つまり日本人の対外態度の変化について考察したものであり、「一 「対して」と「から」の循環」、「二 特命全権大使米欧回覧実記」、「三 学問のすすめ」、「四 「対して」と「から」の分裂」、「五 その後に来るもの」の五つの部分からなっている。その中で、とりわけ近代日本人における対外認識の構造について、「外部に「対して」自己主張する面と、外部「から」影響を受ける面」との「二重の構造」をもつ「日本人の世界像」を探求するため、『実記』そのものを考察対象として分析し、『実記』が近代日本の対外観を要約して余すところないものであると認識した²¹⁾。そして、その結論として次のように述べた。

1頁。)

16) 下村氏は、この自著で明治日本の性格は条約改正を課題とすることによって規定されたと強調し、戦前における岩倉使節団の対外交渉までの研究が極めて少なく、言及も簡単であると痛感したため、第五章「岩倉使節の対欧米交渉」を設定した。第五章は、第1節「使節の使命と旅程」、第2節「対米交渉」、第3節「対米交渉と留守政府の態度」、第4節「欧州諸国との交渉」からなっているが、その重点は第2節と第3節の日米交渉である。しかしながら、第五章は外交史のかつ国際法的視点から岩倉使節の政治的使命を説明したものであるが、思想史のかつ比較文化的分野での探求は言及していなかった。（下村富士男『明治初年条約改正史の研究』、吉川弘文館、1962年、149-257頁。）

17) 家永三郎『外来文化摂取史論』、岩崎書店、1948年、（復刻版）青史社、1974年。

18) 田中彰『岩倉使節団の歴史的研究』、岩波書店、2002年、5頁。

19) 稲生典太郎『条約改正論の歴史的展開』、小峰書店、1976年。石井孝『明治初期の国際関係』、吉川弘文館、1977年。

20) 前掲注18、5頁。

21) 前掲注18、6頁。

使節団の関心は、米欧先進国から何を学ぶかということに集中していたし、使節団を送った明治の指導者たちの関心は、米欧先進国に対して国権を伸長することに集中していた。『回覧実記』そのものも西洋に対して東洋の「道徳の政治」を強調すると共に、西洋から学ぶべきことの技術制度にととまらず、おそらくはその論理的基礎と歴史的な文化の厚みにまで及ぶだろうことを示唆している。近代日本の最初の組織的な対外観は、第一に米欧観にはかならず、第二に米欧に「対して」と米欧「から」の二面を含み、その二面を統一する原理として「富国強兵」の目標を掲げていたということになろう。「富国強兵」の目標は、一八七〇年代の日本をめぐる国際情勢のもとで、鋭敏で勤勉な一国民当然生みださざるをえずして、生みだしたものであった。すべてはそこから始まるのである²²⁾。

田中氏は、上記の述べたものを自著『岩倉使節団の歴史的研究』で引用し、「加藤氏は岩倉使節団と『実記』を重ねてみている。『実記』の分析から岩倉使節団ないしは岩倉に代表される明治維新のリーダーたちの対外観を見ようとしているのである。」と指摘した²³⁾。

加藤論文に対して、芳賀論文はそのサブタイトルを「久米邦武の米欧回覧実記」とし、『実記』を明治初年の一知識人としての久米邦武の「西洋体験」に収斂してしまう。芳賀氏の自らの言葉でいうと、「この書はこうして元來官の意に出、公刊前におそらく検閲もあったろうし、形式的には官製品である。しかし実質は完全に久米邦武個人であった。²⁴⁾」と分析した。その理由について、芳賀氏は、(1)『実記』は「活気に満ちた、ときに詞的感動さえ伴った彼の西洋発見の日記」であること、(2)「久米編纂のきわめてソリッドな西洋文明百科辞書」であったこと、(3)二字下げの「論説」部分は、「彼の西洋文明批判、そして同時に祖国の文化と社会に対する反省と立言」であり、「その当日に書かれた感想もあり、後日米欧全体のパースペクティヴを抱擁してから再び加えられた複眼的評論も多い」し、「いずれにしても、自身の具体的見聞のうちから掘り起され、未来の歴史家久米の全知識を動かして考量され、彼の良心と愛国心にかけて判断された、責任のある思想である。²⁵⁾」、ということをもとめた。

加藤論文と芳賀論文における『実記』に対する対照的な捉え方については、いずれも一面においてまちがってはいない。しかし、それは加藤論文が政治史と絡み合う思想史の立場から岩倉使節団への広がりをもつものに対して、芳賀論文は久米邦武個人の文学的感性に収斂させて『実記』を見ようとする方法論の相違ともなっている²⁶⁾。この問題は、『実記』から何を読み取るかという場合の基本的な姿勢と絡む。また、それは以後の研究に常に付きまとう問題なのである。

22) 加藤周一「日本人の世界像」、(『近代日本思想史講座』八、筑摩書房、1961年)所収、243頁。

23) 前掲注18、6頁。

24) 芳賀徹「明治初期一知識人の西洋体験—久米邦武の米欧回覧実記—」、(島田謹二教授還暦記念論文集『比較文学比較文化』、弘文堂、1961年)所収、352頁。

25) 前掲注24、352-353頁。

26) 前掲注18、7頁。

要するに、上記のように政治思想史あるいは比較文化史的研究が出てきたことは、『実記』を巡る本格的な歴史的研究の一つの伏線となった。

第三期（1976年－1990年）は、第二期の研究を受け、外交史的研究や思想史のかつ比較文化史的研究もさらに進むが、最大の特徴は本格的な歴史的研究が急速に幅広く展開したことである。その画期となったのは、1975年から1976年にかけて『実記』全5冊の復刻版（宗高書房、1975年）が刊行され、とりわけ岩波文庫版（全5冊）が1977年から1982年にかけて刊行され、容易に入手可能となった。さらに、復刻版の解説編としての大久保利謙氏編『岩倉使節の研究』（前掲注13）が刊行されたことは、岩倉使節団派遣における政治史的研究を始めとする岩倉使節団の歴史的研究を大いに促進した。この研究により触発された、岩倉使節団ないし『実記』を巡る政治思想史的研究や、そのほかの分野の研究論文も多く発表されていくようになった²⁷⁾。

一方、第三期における歴史的研究に関するいくつかの特色が、次のように田中氏によってまとめられた。第一に、この使節団が米欧「大国」から帰航路上の東南アジア国々を含む「小国」に至るまでを視察し、政治・社会・経済・産業・軍事・教育・宗教・文化・思想等々あらゆる分野にもわたり丹念に調査し、かつそのそれぞれに鋭い洞察を加えている事実に着目し、それが全面的に解明され始めた意義は大きい。また、第三期の研究は、岩倉使節団に関する戦後高校以下の歴史教科書に記した明治初期外交の条約改正の失敗という叙述を修正し、使節団における先進諸国の近代的制度および文物を調査し、日本近代国家形成に果たしたこととその役割についても中学校歴史教科書に補足した。第二に、岩倉使節団を巡る研究について、個別研究の論文が次第に発表され、経済史上の意義や外交史のかつ政治思想史的分析のみならず、宗教や音楽、科学等々、第二期まで全く及ばなかった分野にまで分析のメスが入れられ、研究は多面化すると同時にいっそう精緻かつ個別化していったのである。第三に、視察された諸国の現

27) 前掲注18、8-9頁。第三期の論文としての研究成果について、筆者の識見により代表する論文が下記のとおり列挙される。石附実「岩倉使節団の西洋教育観察」（『季刊日本思想史』（7）、ベリかん社、1978年）所収、3-19頁。山崎渾子「岩倉使節団における宗教問題——『米欧回覧実記』に見える宗教観」（『北大史学』（18）、北大史学会、1978年）所収、1-13頁。森川輝紀「英国の新聞報道にみる岩倉使節団」（上滝孝次郎教授退官記念『埼玉大学紀要〔教育学部〕教育科学』28（2）、埼玉大学教育学部編、1979年）所収、13-26頁。毛利敏彦「岩倉使節団の編成事情——参議木戸孝允の副使就任問題を中心に——」（『国際政治』（66）、L7、1980年）所収、128-147頁。北政巳「明治日本の近代化への模索——岩倉使節団とスコットランド紀行——」（『創価大学アジア研究』（2）、1981年）所収、83-107頁。田中彰「岩倉使節団とその歴史的意義」（『思想』（709）1983年）所収、64-98頁。毛利敏彦「岩倉使節団の文明論——『特命全権大使米欧回覧実記』を読む——」（『日本史研究』（274）、1985年）所収、76-90頁。太田昭子「イタリアにおける岩倉使節団——現地新聞報道の分析——」（『比較文化研究』（27）、東京大学教養学部比較文学比較文化研究室編、1988年）所収、41-68頁。宮永孝「オランダにおける岩倉使節団」（『社会労働研究』34（2）、法政大学社会学部学会、1988年）所収、1-72頁。松村剛「新聞に見る岩倉使節団のバリ滞り」（『比較文学研究』（55）、東京大学比較文学会編、1989年）所収、76-96頁。藤井泰「岩倉使節団のバーミンガム訪問——地元新聞の報道記事の紹介——」（『松山大学論集』1（5・6）、松山大学学術研究会、1990年）所収、157-207頁。

地史料を使い、とりわけ当時の新聞記事の史料の発掘と分析によって新たな分析が始まった。その研究の動きは、以後の様々な分野での現地史料の発掘による個別研究が進んでいくきっかけとなっている。第四に、岩倉使節団ないし『実記』の研究は、次第に学際的かつ国際的共同研究として見扱われはじめたのであるが、1989年9月にイギリスのシェフィールドでの「国際岩倉使節研究学会」はその国際化・学際化の一つのあらわれである。かくして、岩倉使節団ないし『実記』の研究は次第に裾野を広げてきた²⁸⁾。

第四期（1991年－現在）の特徴は次のように田中氏によって要約された。第一に、既に第三期に始まった『実記』の基礎資料の整備と研究および『実記』を編纂した久米邦武氏を巡る研究が進んでいった。「久米邦武文書」は1982年に設立された久米美術館に収蔵され、同美術館によって整理・編纂され、後に『久米邦武文書』（全4巻、吉川弘文館、1999年～2001年）という書名として公刊された。その第3巻は岩倉使節団関係の文書、とりわけ『実記』の公刊前の素稿類や『実記』執筆のための基礎史料（翻訳史料を含む）を収め、第2巻（科学技術史関係）にも関連史料を載せている。これらによって歴史家の久米邦武の実像が次第に浮き彫りにされると共に、岩倉使節団の研究がいちだんと進展する道が切り開かれたのである²⁹⁾。第二に、第三期に始まった学際的、国際的研究の成果が公刊されるようになった。その中で、代表的といえる研究成果は、田中彰・高田誠二編著『『米欧回覧実記』の学際的研究』（前掲注12）、西川長夫・松宮秀治編『『米欧回覧実記』を読む——一八七〇年代の世界と日本』³⁰⁾、芳賀徹編『岩倉使節団の比較文化史的研究』³¹⁾である。

田中氏が高田氏と共に編著した『『米欧回覧実記』の学際的研究』は、北海道大学の各学部所属の同人のみならず、アメリカの日本研究者の協力を受けて形成された学際的かつ国際的研究成果である。それは戦後岩倉使節団ないし『実記』の研究において最初の総合的研究業績として、大いにのちの研究進展に寄与した。この編著は、三つの部分からなっている。第1編は、「実録の書としての『米欧回覧実記』」をテーマとして、使節団の足跡を残した米欧諸国での制度・文物の調査をめぐって様々な研究論文が載せてあるが、その中で、とりわけ先述の武田論文「大英博物館を見た二つの東洋——『米欧回覧実記』と『環游地球新録』³²⁾——」は、日清の基礎原史料を使って比較文化史的視点から日清の知識人における欧米工業文明に対して異なる

28) 前掲注18、9-10頁。

29) 前掲注18、11頁。

30) 西川長夫・松宮秀治編『『米欧回覧実記』を読む——一八七〇年代の世界と日本』、法律文化社、1995年。

31) 芳賀徹編『岩倉使節団の比較文化史的研究』、思文閣出版、2003年。

32) 『環游地球新録』の作者は中国近代的郵政事業に尽力した、清国税関の役人であった李圭（1842-1903）である。李氏は当時清国税関代表として1876年のアメリカ建国百周年の博覧会に出席し、アメリカをはじめとする欧米諸国を巡覧し、帰国後遊歴した体験をまとめて『環游地球新録』を書いて公刊させた。その中で、アメリカ郵政事業について詳細に報告し、後に清国郵政の創立に大きな影響を与えた。（李圭『環游地球新録』、湖南人民出版社、1980年）

反応と認識について考察したものである。第2編は、「洞察の書としての『米欧回覧実記』」をテーマとして、西洋先進国の宗教・工業・農業技術などの受け入れの背景として、学際的に岩倉使節団および『実記』作者の久米邦武の西洋工業文明への認識について考察したことがあった。第3編は、『実記』の索引作成をめぐり、地名索引をはじめ、技術関連項目解説分類集成や農業関連項目分類集成、使節団の日程表や経路図などについて詳細にまとめたものである。

西川氏が松宮氏が編著した『『米欧回覧実記』を読む——一八七〇年代の世界と日本』は、二つの部分からなっている。第1部分は、「I 諸国」というテーマとしてアメリカ編の2章、イギリス編の1章、フランス編の1章、ドイツ編の3章、ロシア編の1章、ベルギー編の1章、オーストリア・オランダ編の1章、スイス編の1章、イタリア編の1章、北欧・南欧編の1章、ヨーロッパ編の1章、帰航日程の1章、あわせて15章から構成している。その中で、掲載された研究論文は人文・社会科学を跨ぐ比較文化史の特徴をもち、『実記』にある基礎原史料に基き使節団の西洋工業文明の受容と体験について検討したものである。第2部分は、「II 諸論」をテーマとして、主として『実記』そのものから現れた文明観と政治観を巡って検討したが、その結論の一つとして、『実記』の見事な風景描写は多くの場合その背景に中国の古典の原型ということが挙げられ、編著者の久米邦武本人にある儒教的な「徳の政治」の理念が『実記』の叙述を貫き強く働いていると興味深く強調している³³⁾。

芳賀氏が編著した『岩倉使節団の比較文化史的研究』は、日本人学者のみならず、外国人学者たちの協力を得て形成された学際的かつ国際的研究成果である。その中でも、注目に値するところは二つである。一つは序章の討論であるが、もう一つは岩倉使節団の西欧都市研究である。序章は、そのサブタイトルの「日本近代化における連続性と革新性」とし、「武士知識人の集団」、「薩長閥と旧幕臣」、「徳川日本の西洋研究の継承」、「空前絶後の西洋文明研究」、「『特命全権大使米欧回覧実記』の公刊」という五つの側面から明治維新と岩倉使節団との相互的かつ歴史的つながりについて考察し、使節団の研究・調査の成果によって日本近代化における伝統的連続性と「文明開化」や「富国強兵」に溢れた革新性との完璧な統一性について積極的に評価した。そして、使節団の西欧都市研究は芳賀氏によって自ら出された研究成果であるが、筆者は『実記』の史料に記された西洋先進国の都市建設の状況、即ち道路舗装から上下水道の設定、都市公園の選定に至るまで、建築学の視点から考察したが、とりわけニューヨーク、パリ、ベルリン、ヴェネツィアという四つの米欧大都市を「雄都・名都」として褒美し、建築美学の視点から検討し、岩倉使節団ないし久米邦武の西洋文明への理解の広さを解明した³⁴⁾。

3. 中華人民共和国（以下「中国」と示す）における岩倉使節団の研究動向

中国は、1980年代以降岩倉使節団を巡る研究が戦後日本の諸研究成果および公刊された原史

33) 前掲注30、11頁。

34) 前掲注31、3-13頁、247-325頁。

料を研究の基礎として急速に展開していた。1980・1990年代の代表する論文としては、孫承「岩倉使節団と日本近代化」³⁵⁾、湯重南「岩倉使節団出使欧美」³⁶⁾、陶惠芬「彼得使節団と岩倉使節団西方之行的比較」³⁷⁾、牛淑萍「近代日本修改不平等条約述論」³⁸⁾がある。

孫氏の論文は、岩倉使節団の政治史上の役割を日本近代化の潮流に置いて考察したものである。その中でも当時の維新政府における「征韓論」を巡る論争にあたり使節団高層が持った「内治優先論」について分析し、明治6年10月政変前後の経緯を検討した。また岩倉使節団の歴史的影響に関して、孫氏は「殖産興業の発展を促す」、「近代的天皇制の創出のため準備する」、「近代的教育の普及に寄与する」などの三つの方面で政治史的かつ思想史的影響と意義をまとめた。陶氏の論文は、17世紀の初代ロシア皇帝ピョートル一世（Peter the Great 1672-1725）が率いた使節団と岩倉使節団との比較考察を行い、とりわけグローバルな時代背景と歴史条件との異なり、そして両使節団派遣の初志や制度・文物調査の相違点に至るまで詳細に分析したものであるが、中国大陸での岩倉使節団研究にとって、初めて比較文化史的視点からの研究成果といえる。

21世紀に入ると、中国の岩倉使節団研究は国際政治的かつ社会学的に扱われるようになった。それを代表する論文は、陳更生「日本対外関係中「欧亜双重身分」策略的歴史演進」³⁹⁾、湯重南「日本帝國的國家戰略与軍事戰略」⁴⁰⁾、盧正濤「邁向建制型國家：近代中日比較」⁴¹⁾である。陳氏の論文は、近代以来における日本の欧亜二重身分の歴史の変遷及び自己認識について考察したものであるが、とりわけ岩倉使節団の成果を第1回「脱亜入欧（1874-1933）」の背景に考察し、明治時代の近代化の意識を社会的共通認識として認めた。湯氏の論文は、第2節「近代日本走上軍国主義道路、其國家戰略發生根本轉變」の第2部分「日本軍国主義的發展階段及特性」において、19世紀の国際政治的「弱肉強食」理論を日本が導入したことを岩倉使節団の「成果」として推定し、それをいわゆる「日本軍国主義の形成階段」の主な推進力として指摘した。そこには著者の個人的歴史観が表れているが、客観的かつ学術研究的に検討する余地があるであろう。盧氏の論文は、社会学的角度から、西洋近代立憲政体導入における中日の受け入れ態度と結果について比較し、考察したものである。その中で、西洋工業文明の東漸にあたり清国指

35) 孫承「岩倉使節団と日本近代化」、(『世界歴史』、中国社会科学院世界歴史研究所、1983年第6期)所収、121-134頁。

36) 湯重南「岩倉使節団出使欧美」、(『世界歴史』、中国社会科学院世界歴史研究所、1985年第8期)所収、54-61頁。

37) 陶惠芬「彼得使節団と岩倉使節団西方之行的比較」、(『世界歴史』、中国社会科学院世界歴史研究所、1986年第10期)所収、54-60頁。

38) 牛淑萍「近代日本修改不平等条約述論」、(『史学月刊』、1999年第5期)所収、88-93頁。

39) 陳更生「日本対外関係中「欧亜双重身分」策略的歴史演進」、(『河北師範大学学报(哲学社会科学版)』、2001年第1期)所収、131-134頁。

40) 湯重南「日本帝國的國家戰略与軍事戰略」、(『國際政治研究』、2015年第1期)所収、11-20頁。

41) 盧正濤「邁向建制型國家：近代中日比較」、(『學術界』2016年第1期)所収、63-74頁。

導層の躊躇に対して明治新政府が欧米に岩倉使節団を送ったことを積極的に評価しているが、また「岩倉使節団の成果は、帰国後公刊された大量の調査報告書や欧米諸国の知識の普及にあるだけでなく、使節団の正使や副使及び理事官などが同時に政府所属の各部門の責任者であったため、その視察の諸経験が速やかに旧日本の改造や新日本の建設という実践に運用されていた。」⁴²⁾と客観的に結論づけた。

二、バーリンゲーム使節団に関する研究

バーリンゲーム使節団研究は、19世紀後半以降に始まったが、第二次世界大戦以降急速に進み、多くの研究成果が掲載された。本稿は、便宜上、(1) 19世紀後半におけるバーリンゲーム使節団研究、(2) 20世紀以来のバーリンゲーム使節団研究、(3) バーリンゲーム使節団研究の新たな動向、という三つの方面で検討する。

1. 19世紀後半におけるバーリンゲーム使節団研究

バーリンゲーム使節団研究史において、初めて研究を行ったのは、かつて清国同文館天文学・数学の教授をつとめたドイツ人のJ. von Gumpach氏である。この研究成果は1872年に『The Burlingame Mission: A Political Disclosure by Official documents Mostly Unpublished』(前掲注8)という大題名として上海、ロンドン、ニューヨークで公刊された。本論は20章からなっているが、使節団を巡る遣使前後における清政府の建策と決議、欧米諸国の対清政策、使節団の各国活動と交渉などを、ほぼ全面的に考察している。本書の最大の特徴は、直接当時の欧米諸国における対清政策の原公文書や外交ドキュメント、そして公私書類を利用したのである。これは以後の研究にとってきわめて貴重な先行研究となった。

2. 20世紀以来のバーリンゲーム使節団研究

20世紀に入ると、初めて政治家・外交官としてのバーリンゲームの生涯を考察したのは、まずアメリカの研究である。この研究成果は、アメリカのイエール大学東洋歴史准教授をつとめたF.W. Williams (1875-1928)氏によって編纂されたものであり、『Anson Burlingame and the First Chinese Mission to Foreign Powers』を書名として1912年にニューヨークで上梓されたものである。F.W. Williams氏の父親はイエール大学最初の中国語及び中国文学の教授をつとめたSamuel Wells Williams (中国名: 衛三畏、1812-1884)氏である。S.W. Williams氏は1860年代に北京駐在アメリカ公使館で外交官としてつとめたが、1862年7月以降公使をしていたバーリンゲーム氏との実の同僚関係があった。F.W. Williamsがこの著作を執筆したのは、父親の中国

42) 前掲注41、66頁。

研究の家風を継いで米清関係を研究しつづけるためのみならず、父親の同僚かつ知人であったバーリンゲーム氏に敬意をはらいたかったためであろう。

この著作の本論は、「The Evolution of A Diplomatist」、「The Genesis of the Mission」、「The Mission in America」、「The Clarendon Letter and British Policy」、「The Opposition in China」、「The End of the Mission」という6章から構成されているが、「The Clarendon Letter and British Policy」を除く他の部分は、バーリンゲームの個人プロ生涯および第二次アヘン戦争以降の米清関係における氏の外交功績、主に使節団関係について詳細に考察されている。序文におけるバーリンゲームの外交的卓識について、著者の評価は下記のとおりである。

“It was he who first declared abroad the necessity of assisting China to find herself, and of elevating the diplomacy of Western powers in Asia to something higher than securing for their traders the largest possible advantages in a secular struggle for profits. He recognised, what the merchants themselves could not comprehend, that there was danger to China in summarily accepting the materialism of the West; and danger to China meant and still means the cancellation of every political equation in the arrangement of civilised society. In this sense it appears to me that Mr. Burlingame can properly be called the father of the open-door principle which Mr. Hay proposed as a symbol for the unification of outside interests when China threatened, in a moment of aberration, to become a derelict among nations.⁴³⁾”

上記のように、著者は、第一・二次アヘン戦争で敗戦した清国に対する当時欧米諸国の「武力威圧」の代わりに、中国の漸次的近代化に期待する「協力政策 (the Co-operative Policy)」を打ち出し、後に「門戸開放政策 (the Open Door Policy)」の提出に対して国際政治的に工夫しておいたバーリンゲームの業績について積極的に評価した。そして、中国近代化が長く果してしない過程であり、機能主義的西洋工業文明の受け入れがたやすく成功するものではないと、はっきりと認識したバーリンゲームの傑出した識見を指摘した。さらに、著者は執筆初志について下記のとおり述べた。

“But now that the antagonisms of the past are allayed he should be returned to our Knowledge and his purpose of peace and goodwill, his lofty principle of forbearance, and his method of persevering suavity appreciated.⁴⁴⁾”

43) 前掲注7、序文 (Preface)、VII - VIII 頁。

44) 前掲注7、序文 (Preface)、IX 頁。

上記の「the antagonisms of the past (過去の対抗)」は、おそらく1900年頃の「北清事変」と指すのであろう。この著作を通じて中国人と西洋人のお互いの偏見と憎みは超克した。当時中国との協力政策の再開を呼びかけたかった著者の本意がここで示している。この著作は、後のバーリンゲーム使節団研究にとって手引きのような存在となるが、この著作そのものは以後の研究の原史料として重視されている。

約十年後、アメリカ歴史学者の Tyler Dennett (1883-1949) 氏は、自著『Americans in Eastern Asia: A Critical Study of United States' Policy in the Far East in the Nineteenth Century』⁴⁵⁾ の第4部分「協力政策」において、当時アメリカのアジア・太平洋政策の背景にバーリンゲーム使節団及び「バーリンゲーム条約」について考察し、アメリカとイギリスにおける使節団の外交的努力と一定の成功について積極的に指摘した。そして、この著作は、以後の19世紀のアメリカのアジア・太平洋政策研究にとって貴重な先行研究成果といえる。

中国のバーリンゲーム研究に関して、まず銭実甫「1868年的「蒲安臣使団」和「蒲安臣条約」」⁴⁶⁾ は、英米主導の「協力政策」の本意、バーリンゲーム使節団派遣経緯、「中米天津条約続増条約」の影響という三つの方面から考察したものである。その中で、バーリンゲーム使節団に関する分析を通じて、「協力政策」の「侵略主義的一面」と清政府の弱腰外交を指摘した。また「中米天津条約続増条約」による清国幼童アメリカ遊学の招へいについて、これを当時のアメリカの「文化的侵略政策の一環」として強く批判した。

1970年代、日本人学者坂野正高氏は、自著の『近代中国政治外交史』(前掲注5)の第8章「同治中興と洋務運動」の第5節「総理衙門の外交」において、バーリンゲーム使節団の功績について二つの注目すべきことをまとめた。一つは、先述の「中米天津条約続増条約」の締結を通じて、清国がアメリカによって当時の国際法で平等の相手国として認められたのであるが、以後清国における欧米諸国との交渉に積極的な影響を与えたことである。もう一つは、バーリンゲームの努力でロンドンにおいて(1)清国の独立と安全とに相容れないように非友好的の圧力を加えず、(2)地方官憲よりはむしろ清国中央政府を相手とすることを望む、という趣旨の声明を出させたことである。二つの成果は先述の「協力政策」の一環として外交史的意義がきわめて大きいと指摘されている。

坂野氏の研究を踏まえて、日本人学者阪本英樹『月を曳く船方—清末中国人の米欧回覧』(前掲注9)は使節団随員の張德彝の視察手記『欧米環游記』を中心に、使節団正使の一人である志剛の手による『初使泰西記』を参考にしながら、その全行程を主に原文注釈の手法を用いて考察したものである。そして、使節団の視察が阪本氏によって文化史意義的に様々な角度から解明された。そこには阪本氏の独特の歴史観や思想が表れているため、客観的にそう言えるか

45) Dennett, T.: Americans in Eastern Asia: A Critical Study of United States' Policy in the Far East in the Nineteenth Century, Barnes & Noble, INC., New York, Reprinted 1963

46) 銭実甫「1868年的「蒲安臣使団」和「蒲安臣条約」」、(『歴史教学』、1964年第9期)所収、11-15頁。

どうかにはなお検討を要するものがあるだろうが、これらの記述が視察記の紹介を躍動的にし、本書に彩りを与え、面白くしていることは疑いがない。さらに、この著作を通じて当時中国の知識人が欧米工業文明をどのように観察するかが明らかになった。そして、使節団に対する欧米各国間の中国観の違いも見えること、後年日本が送った岩倉使節団の目的意識や成果との間に大きな差があること、それがなぜであるかなどが手にとるように理解できる。その意味でも、阪本氏の著作の学術的意義はきわめて大きいことはいうまでもない。

一方、1990年代以降、中国のバーリントン使節団研究は主にアメリカ研究の成果を利用し、バーリントンと中国近代化とのつながりについて各側面から考察された成果が相次いで発表されていった⁴⁷⁾。それらを代表する論文は、王先亭「蒲安臣と「合作政策」」⁴⁸⁾、侯中軍「不平等概念与近代中国的平等条約」⁴⁹⁾、楊国強「洋務事業中的西洋人」⁵⁰⁾である。侯氏の論文は、1868年7月にアメリカで調印された「中米天津条約続増条約」(The Burlingame Treaty)の国際法的合法性について考察し、条約調印当時におけるバーリントンの越権行為及び清政府の事後承認に関する経緯を分析したうえで、このような状態で締結された条約は不平等の「越権条約」であると指摘した。それに対して、楊氏の論文は、中国近代外交変容におけるバーリントンの協力政策を検討し、清国のアメリカへの好感を引き出し、以後百年以上の中米友好の基礎をつくったバーリントンの歴史的役割について積極的に指摘した。21世紀に入ると、王曉秋「三次集体出洋之比較：晚清官員走向世界的軌跡」⁵¹⁾は、晚清における三回の遣使⁵²⁾を巡って清国近代的外交官制度形成の背景を比較し、考察したものであるが、とりわけバーリントン使節団派遣における当時清政府外交の「半植民地化」という無力感の現状を検討し、その使節団派遣を通じて清国近代的使節制度樹立に対する積極的役割を客観的に指摘している。

47) 筆者の識見により代表的論文は下記のとおり列挙される。蒲安臣と中米関係：徐国璋「威廉・亨利・西沃德和美国亚太擴張政策」、(『美国研究』、1990年第3期)所収、97-113頁。蒲安臣と清国の国際法導入関係：陳策「洋務運動時期国人对萬国公法的認知探析」、(『理論界』、2009年第1期)所収、127-128頁。張衛明「赫德与晚清国際法的系統伝入」、(『求索』、2009年第10期)所収、202-205頁。蒲安臣と清国の近代外交の変容関係：張宇權「晚清政府的外交心態与駐外使团的派遣」、(『歴史教学』、2010年第14期)所収、13-19頁。尤淑君「『出使条規』与蒲安臣使節団」、(『清史研究』、2013年第2期)所収、143-151頁。蒲安臣と協力政策関係：田肖紅「蒲安臣对華租界政策考析」、(『世界歴史』、2013年第5期)所収、83-97頁。

48) 王先亭「蒲安臣と「合作政策」」、(『安徽師範大学学报』、1991年第3期)所収、356-361頁。

49) 侯中軍「不平等概念与近代中国的平等条約」(『中国社会科学院研究生院学报』、2006年第2期)所収、102-107頁。

50) 楊国強「洋務事業中的西洋人」、(『探索与争鳴』、2009年第4期)所収、59-65頁。

51) 王曉秋「三次集体出洋之比較：晚清官員走向世界的軌跡」、(『学術月刊』、2007年第6期)所収、140-145頁。

52) ここの「三回の遣使」とは、第一回の蒲安臣使節団(1868-1870)であり、第二回の海外遊歴使(1887-1889)であり、第三回の五大臣出洋(1905-1906)である。(前掲注51)

3. バーリングゲーム使節団研究の新たな動向

近年グローバルヒストリーの背景においてバーリングゲーム使節団研究は新たな階段に上った。その中でも代表的なものは徐国琦氏の研究である。徐氏は「試論「共享的歴史」与中美関係史研究的新範式」⁵³⁾において中米国民の間に「共享的歴史 (A Shared History)」という概念を打ち出した。この概念は、最初に徐氏の恩師であるハーバード大学名誉教授入江昭氏の「文化国際主義 (Cultural Internationalism)」に由来するが、徐氏によって自ら再定義されたものである。つまりこれまでの中米両国国民の間における「共通した」歴史体験や歴史的旅程などを中米関係史研究の中での重要な位置におかれなければならないのである。そして、その「共通した歴史」の視点から過去の中米関係を読み取ること、よりよく現在の中米関係に対する理解出来ること、これからの中米両国国民の友好往来に対しても極めて重要な学術意義かつ現実的意義があると徐氏は強調している。さらに、同年に上梓された『Chinese and Americans, A shared History』⁵⁴⁾は、バーリングゲーム使節団を第1章のテーマとして「共通した歴史」の視点から考察している。そこでは、バーリングゲームが清国を代表して使節団を率いたのは、個人的魅力や総理衙門の好感からだけではなく、当時清米両国が直面していた「内憂外患」の存在からである。その「内憂外患」とは、清国側の太平天国運動と第二次アヘン戦争後の欧米諸国の武力威圧であり、アメリカ側の南部の分離勢力と内戦の脅かしである。そのように共通した苦境が両国間の感情を深く共鳴していたからこそ、バーリングゲームが最後に唯一の候補者となり、総理衙門によって選ばれたのである⁵⁵⁾。その解釈はこれまでのバーリングゲーム使節団研究にとって全く新たな意義ないし新たな研究方法を与えたといえる。徐氏の研究のほかに、新しい世界史の認識を背景としたバーリングゲーム使節団の研究者は中国の計秋楓氏と陶文釗氏がいる⁵⁶⁾。

おわりに

岩倉使節団とバーリングゲーム使節団における先行研究を顧みると、いくつかの相違点がある。これまでの日中における遣外使節の研究では、岩倉使節団とバーリングゲーム使節団は別々に考察される傾向があり、その両使節団比較性について十分な研究がなされてこなかった。戦前の岩倉使節団の研究としては、先述の条約改正を巡る外交史的研究などがあり、土屋喬雄と尾佐竹猛らによる個別研究の蓄積もあった。戦後の岩倉使節団の研究としては、『実記』を史料とし

53) 徐国琦「試論「共享的歴史」与中美関係史研究的新範式」、(『文史哲』、2014年第6期)所収、27-39頁。

54) Xu Guoqi: Chinese and Americans, A shared History. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, London, England, 2014

55) 王立新「中美関係史の新叙事—評徐国琦著『中国人和美国人：一部共享的歴史』」、(『美国研究』、2015年第2期)所収、150-157頁。

56) 計秋楓「中国加入近代国際体系的歷程」、(『南京大学学報』(哲学・人文科学・社会科学)、2001年第6期)所収、104-112頁。陶文釗「審視中美関係の一個視角」、(『史学集刊』、2003年第1期)所収、78-85頁。

て思想史的かつ比較文化史的研究は存在したとしても、それは日本を原点とした日米・日欧間における比較文化交渉という側面のみであった。一方、中国大陸におけるバーリンゲーム使節団の研究としては、最初はプロレタリアートのイデオロギーのもとに行われ、研究成果として、この使節団に関する評価は殆ど否定的であるが、ここ十数年以来この傾向は洋務運動再評価の動向と絡んで若干変化（たとえば徐国琦氏の研究）をみせているものの、基本的には旧態依然といえる。したがって、中国の史料に基づく綿密な吟味考証に裏付けられた本格的な研究成果はいまだ現れていない。

一方、日中両方に両使節団の比較的研究が既に始まった。先述の嚴鈺钰氏の研究（前掲注11）のほかに、劉国軍「中日蒲安臣使団与岩倉使団欧美之行的比較研究」⁵⁷⁾がある。劉氏の研究は、嚴氏のように内容や結論から見れば大同小異であるが、政治的イデオロギーの下に形成された産物といえる。

そして、閔銳武『蒲安臣使団研究』⁵⁸⁾は、岩倉使節団を比較対象として、遣使の背景、使節団に対する日清政府の関心程度、両使節団における西洋文明への認識、両国の歴史的発展に対する両使節団の役割、という四つの方面で検討している。その検討は簡単明瞭でありながら、両使節団比較研究における細部を容易に疎かにしていると考えられる。そこで、閔氏の研究を踏まえて、陸旭「关于晚清蒲安臣使团的兩個問題——以与岩倉使節团的比較為中心」⁵⁹⁾は、いっそう両使節団派遣の政治的背景と使節団の団員選抜を巡って比較的に考察した。

これまでの両使節団における比較研究は、ほぼ上記のような成果であるが、そして政治史的かつ外交史的分野で集中している。異文化コミュニケーションあるいは比較文化史的視点から両使節団を考察する比較研究は今後の課題としたい。

57) 劉国軍「中日蒲安臣使団与岩倉使団欧美之行的比較研究」、(『黑竜江社会科学』、1999年第4期)所収、57-60頁。

58) 閔銳武『蒲安臣使団研究』、中国文史出版社、2002年。

59) 陸旭「关于晚清蒲安臣使团的兩個問題——以与岩倉使節团的比較為中心」、(『千里山文学論集』(80)、2008年)所収、161-180頁。

